

I 学校の概要

学校名	新庄市立 新庄中学校					
学 年	1 年	2 年	3 年	特殊学級	計	教員数
学級数	3	4	4	1	1 2	2 9
生徒数	1 1 4	1 4 0	1 2 6	1	3 8 1	

II 研究の概要

1. 研究主題

- (1) 研究主題（平成15年度校内研究主題）
社会的に自立し、地域に貢献できる生徒の育成
～確かな学力、共生・社会力をつける実践を通して～
- (2) 指定研究主題（平成15年度指定研究主題）
一人ひとりに確かな学力をつける指導と評価のあり方
～数学・英語のコース別指導と評価の実践を通して～

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

- ① 2・3年数学（複数の教師による授業を継続実践して9年目）
② 全 学 年英語（複数の教師による授業を継続実践して8年目）

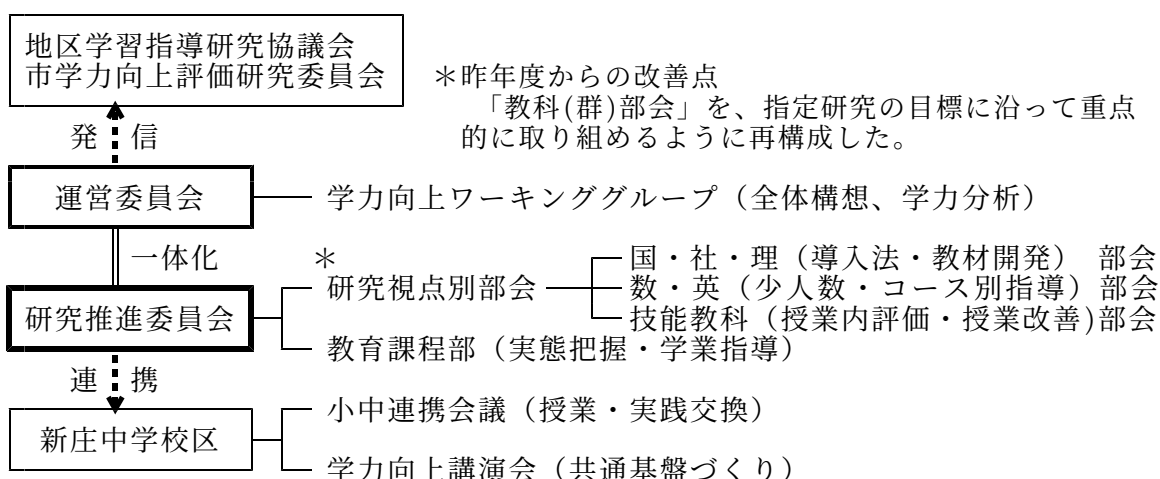
(2) 年次ごとの計画

平成14年度	○ テーマ ① 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫と改善（T Tと少人数学習指導の実践と継続） ② 生徒の学力評価を生かした指導の改善（評価規準に沿った基礎・基本の定着度把握） ○ 研究の見通し（仮説） ① 数学と英語での年間を通したT Tと少人数指導・支援授業の実施 ② 各教科評価規準による到達度の確認と家庭学習を含めた補充・深化学習の習慣化 ○ 研究の内容・方法 ① 数学・英語でT Tや少人数化による授業の工夫と改善を図り、単元や学期末毎等定期的に実態調査と分析を行いながら、変容（成果と課題）を把握する。 ② 指導と評価の実際に関する事例研修と家庭での学習・生活に関するアンケート調査を実施し、学力を支える基盤づくりを行う。
平成15年度	○ テーマ（重点） ① 少人数コース別指導の継続と成果・変容の例示（各教科「学力」の各内容における数値資料の提示） ② 補充や応用など、個に応じた指導・支援のための教材の工夫（他教科・選択教科を含め、開発・活用実践の例示） ③ 実態の評価と成果（「学力」の向上度）等の発信 ○ 研究の視点 ① コース別少人数指導・支援授業の継続と実態に沿った授業改善 ② 補充・深化学習の工夫とコース別の生徒一人ひとりの変容確認 ③ 「学力」実態の数値化・算出と研究成果のH P等での発信 ○ 研究内容・方法（具体的方策） ① 数学・英語でのT T・少人数授業の工夫・改善の継続と成果の提示 ② 必修教科の題材を補充・深化する選択教科の年間計画の作成と実践 ③ 「学力」の理解と日常実践との具体的関連（評価場面）を明示 ○ 授業研究 ① 5 / 2 0 国語（宮城教育大学教授 相澤 秀夫先生とのT T） 数学・英語（単学級T T授業） [要請訪問／一部公開] ② 7 / 1 1 校内授業研究会・全教科 [要請訪問／公開] ③ 1 1 / 1 4 校内授業研究会・全教科 [要請訪問／公開]

平成16年度	○ テーマ（重点） ① 少人数指導・支援の継続と成果・変容の具体例示 ② 開発教材の活用実践の例示 ③ 小中連携、教科・総合的な学習等との関連を図った指導の充実 ○ 研究の視点 ①～③の実践について公開授業やHP等を通して、生徒の実態や変容の様子を保護者、地域に発信・公開する。 ○ 研究内容・方法（具体的方策） ①～③ 積み重ねた実践成果の比較・分析 ④ 研究集録の発行 ○ 授業研究（公開授業を2回予定）
--------	---

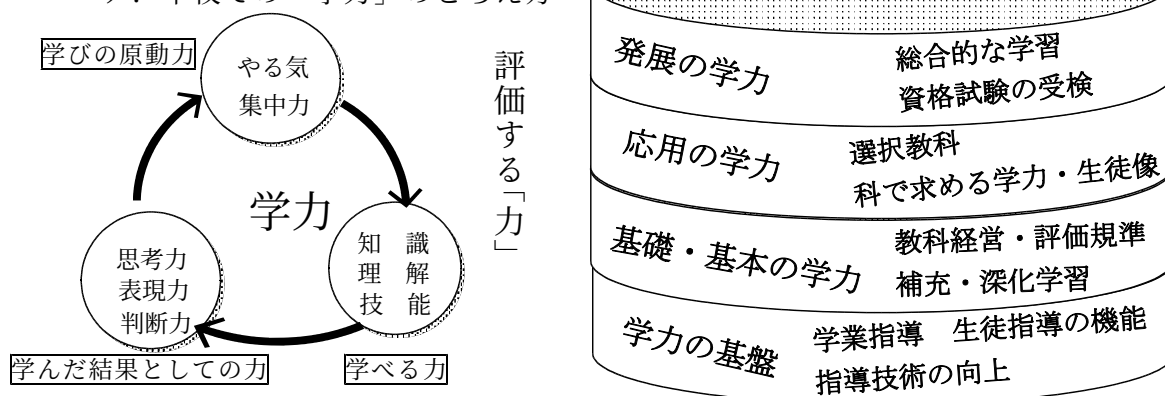
(3) 研究推進体制

① 研究組織図



② 昨年度課題への対応

ア. 本校での「学力」のとらえ方



イ. 学校・家庭・地域のさらなる協力・連携
HP開設（アクセス数今年度 1,000 件超）

III 平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

(1) 「学力」のとらえ方を全体で理解・統一できた。

上記(3)②で記したように各教科の観点別評価（4～5観点）から「学力」を3分類の力ととらえ、定期テスト終了毎に全教科で数値化した。（最終的には2月初旬実施のCRTテストや下旬の学年末テストで年間を通した数値を算出する）

(2) 少人数授業加配の増員を生かした少人数コース別指導の充実

① 個に応じたきめ細かな指導

数学では2学級を4コース（各コースに1教師配置）に、英語はTTの良さを生かしながらの3コース（応用・標準コースに教師各1配置、基礎コースはTTで2教師配置）に分けて少人数授業を継続した。できる限り授業中に、学習プリ

ントに各コースの独自性を持たせ、生徒一人ひとりに声がけや具体的支援を施した。「やれた・分かった」という充実感を伺わせる生徒が増えたことが、下記アンケートから判断できる。（2学期終了時、3年生126名、数字はすべて％）

○ 自分に合った授業形態 　　　　　％　　　○ 向上したと思われる授業態度（英語）％

体制	T T		少人数	
教科	数学	英語	数学	英語
割合	11	25	84	76

【備考】未記入等割愛、英語は「両方」含む

○ 向上したと思われる力（英語）

	自信 声量	挙手 発表	ペア 活動	真剣 視聴	着席 準備
B	10	44	10	17	12
R	17	26	13	22	9
A	28	50	3	13	6

	対話	話す	音読	筆記	聴解	読解	言語	文化
B	7	7	24	22	12	15	7	0
R	7	2	17	15	24	11	13	2
A	9	9	13	19	16	19	3	9

【備考】

・太数字は各コースの重点向上項目

・「言語」「文化」は知識

② 「学力」（向上）の実態

数学・英語のみならず、全教科で観点別評価から「学力」としての3つの力に集約し、「学力向上」の数値化・比較化を図った。「知識・理解・技能」の定着・向上は単元によって流動的ある。前期末に大きく向上し、夏季休業を経て下降したように見えるが、後期の指導を通して回復し、前期中間より向上している。

○ 学力の向上（数学）

％

学力	評価	前期中間	前期期末	後期中間	後期期末	C R T
知識 理解 技能	A	16	45	33		
	B	59	50	51		
	C	26	5	17		
思考力 判断力 表現力	A	24	24	25		
	B	35	57	42		
	C	42	19	21		
やる気 集中力	A	—	47	56		
	B	—	50	24		
	C	—	3	21		

2. 今後の課題

- (1) 改めて学力の定着・向上や学習環境を支える「学習の基盤」づくりが大切である。学業指導や学年・学級経営のみならず、家庭や校外生活での充実がなければ、生徒指導上の課題が大きく生じる。「学業指導」研修を継続させながら、「学力の基盤」づくりを確固たる状態にする。
- (2) 本校なりに「学力」を解釈し、できる限り客観的な向上度を示したが、（予想通り）特に、「知識・理解・技能」に関わる力が単元内容に大きく左右された。学年末の到達度テスト等で再確認して、4月当初との比較・分析を行う。
また、少人数指導の推進について、やはり教科部会等打ち合わせの時間確保に苦慮した。担当者の寸暇の意欲的情報交換に負うところが大きい。
- (3) 必修教科を補充する形の選択教科は充実してきているが、実生活や総合的な学習で十分生かした深化の選択学習のより具体的な成果が求められる。
- (4) 数学で希望人数や理解度により後半コース数を増やしたり、英語では対話活動や音声面の評価にT Tが効果的であることから、少人数指導加配が必要である。

IV 学力等把握のための学校としての取組

1. 年度当初に集団基準準拠検査（N R T）と学年末に目標基準準拠検査を実施
2. 各教科の学力向上確認方法の提示
「評価規準（観点別評価）の推移」「N R T・C R Tの分析と追指導」「国立教育課程研究センター作成の問題を活用した定着率の確認」等、教科により1～6項目について数値化する。
3. 学校生活についてのアンケート調査（生徒・保護者用、前後期各1回）と学校評議員会による評価・検討

V フロンティアスクールとしての研究成果の普及

1. 研究集録の作成とHPを通した作成資料の公開
2. 公開授業の実施（平成16年度2回予定）と小中連携会議、フロンティア校の交流

◇ 次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】 ☐ 15年度からの新規校 ☒ 14年度からの継続校

【学校規模】 ☐ 3学級以下 ☐ 4～6学級
 ☐ 7～9学級 ☒ 10～12学級
 ☐ 13～15学級 ☐ 16学級以上

【指導体制】 ☒ 少人数指導 ☒ T．Tによる指導
 ☐ その他

【研究教科】 ☐ 国語 ☐ 社会 ☒ 数学 ☐ 理科
 ☒ 外国語 ☐ 音楽 ☐ 美術 ☐ 技術・家庭
 ☐ 保健体育 ☐ その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 ☒ 有 ☐ 無